

医療現場の「知りたい」が見つかる場所

特集

DX 病院の 最前線

機関医療の多言語化と
デジタル対応





医療機関向け情報発信メディア

medico+ メディコ とは？

『medico+』は「mediPhone+connect (connection) community」をコンセプトに、**医療機関の発展を共に目指すコミュニティを構築しつづけるメディア**です。

この度は medico+ を手にとっていただきありがとうございます。この冊子は他の医療機関の取り組みや課題解決方法を共有する場として機能し、「他の病院はどうしているのだろう」「さらなる発展のために取り組めることはないか」に対する解決の糸口となる情報を発信しようと制作したものです。

私たちが創業より支援してきた医療機関とのつながりや知見・強みを活かし、現場で必要なときにすぐ手に取れる情報源として、全国の医療従事者の知見や工夫を紹介し、皆様の課題解決のヒントを提供してまいります。また、メディフォンが提供する外国人医療に関する情報も積極的に発信し、「困ったときは medico+ を見てみよう」と思っていただけのような、身近で頼れる存在を目指します。

『medico+』が、医療現場で働く皆様にとって価値ある一冊となりますよう、心を込めてお届けいたします。

medico+ メディコ

Jul・Aug 2025
Vol.02

CONTENTS

original

P04 **切り取って使える！
外国人患者対応
セミナー紹介ポスター**

original

P05 **メディフォン
説明会の様子**

interview

P06 **進化する外国人患者
受入れ体制と
多言語対応の最前線**

外国人患者受入れ体制整備を本格的に行っている
岡山済生会総合病院の現場課題や体制整備についてご紹介

interview

P10 **「医療の入口」から
始まる医療DX**

予約・受付・問診といった「医療の入り口」における
外国人患者への対応策についてイーヘルスクリニック新宿院
と多言語対応の医療アクセス支援サービスを提供する
Ambii 株式会社との対談インタビュー

service

P15 **患者コミュニケーション
サービス「ポケさぼ」**

動画やメッセージを活用して医療者の説明業務を支援
する患者説明機能と、スマートフォンやタブレットで
行えるアナムネ問診機能を備えたコミュニケーション
システム「ポケさぼ」(株式会社 OPERe) のご紹介



mediPhone 使い方説明会のご紹介



機械翻訳を上手に使いこなせる吹き込み方 etc...

mediPhoneはサービスを導入した方・検討段階の方に、使い方・機械翻訳と電話・ビデオ通訳の使い分け等を丁寧に説明させていただいております。実際に使用するタブレットを触りながら、電話通訳・ビデオ通訳もリアルタイムで通訳者につなぎ、音声や画面の確認することができます。導入後の使用方法を具体的にイメージすることができ、院内への共有もスムーズになるとご好評いただいております。ご依頼はいつでも可能です。ご興味のある方はお気軽にお問い合わせください。

よくある質問

- Q 院内全体に共有したいけど、全員が集合するのは難しい...
- A 開催数は制限がないため、部署ごとでの開催も可能です。
- Q 開催時間はどのくらいですか？
- A 30分～1時間程度です。
- Q 説明会はどのタイミングでお願いすれば良いのでしょうか？
- A トライアル時、導入後等必要なタイミングに合わせて随時開催可能です。
- Q 地方なのですが、来てもらえるのでしょうか？
- A もちろんです。弊社の営業が全国飛び回ります。

電話でのお問い合わせ

☎ 050-1725-8533
(平日 9:00 - 18:00)

メールでのお問い合わせ

✉ mm_sales@mediphone.jp
医療機関名・氏名・メールアドレス・電話番号をご記入の上、お問合せください。

<https://mediphone.jp>

当社ウェブサイトでも資料請求・問い合わせできます。



すべて無料！

外国人患者対応について 手軽に学べるセミナーを 配信中



\\ 毎月更新! //

今後も増える可能性のある外国人患者。
受入れ時のノウハウなど、様々なお役立ち情報
をセミナーでお届けしています。

お役立ちセミナーの一覧・申し込みはこちら



地域中核病院の多文化共生医療 進化する外国人患者受入れ体制と 多言語対応の最前線

本記事では、外国人患者受入れ体制整備を本格的に行っている岡山済生会総合病院の皆様の現場課題や体制整備について、遠隔医療通訳・AI翻訳（以下「mediPhone（メディアフォン）」という）の利用環境の構築と併せて、取材をしてみました。

外国人患者受入れ体制整備
導入事例インタビュー

岡山済生会
総合病院



岡山県岡山市



(写真左)
兼田 紘美様
産婦人科病棟
助産看護師長心得
外国人妊産婦対応と
地域コミュニティ連携

(写真中央)
西中 綾子様
中央手術室
看護師長心得
術前から術中での
通訳ニーズ

(写真右)
矢部 美香様
救急センター
看護師長
緊急対応時の
多言語コミュニケーション

孫 穎悟様
総務課担当
受付から
退院後フォローに
おける課題管理

はじめに

岡山済生会総合病院は、岡山県南東部を中心に二次救急医療・がん拠点病院・周産期医療を担う中核病院です。救急搬送から高度専門治療、手術、出産ケアまで一貫した医療提供体制を整えており、地域の医療安全と患者ケアの中心的役割を果たしています。

が51万2870人（前年同期比54・6%増）と、2019年のコロナ前水準を上回る過去最高を記録しました。また、2024年6月末時点で在留外国人は3万7129人に達し、県民の約1・1%を占めています。これらの背景から、言語・文化の多様性に対応した医療サービスの提供が急務となり、特に救急や手術、周産期領域では的確なコミュニケーションが求められています。

訪日外国人宿泊客数

51
万人超



3.7
万人超
在留外国人



岡山済生会総合病院の 特徴と地域的立ち位置

■孫様 岡山済生会総合病院は、地域中核病院として24時間365日の救急体制を敷き、地域住民と訪日外国人の命を守っています。岡山市内の中心部に位置し、二次救急搬送は年間4542件（2023年度）を受入れており、専用の救急入口と常駐の救急医チームで対応しています。また、日本医療機能評価機構に認定されたがん診療連携拠点病院として、外科、内科、放射線科、緩和ケア科が連携し、2023年度には853件の悪性腫瘍手術を実施しています。

近年、観光振興と企業誘致の影響で訪日外国人と在留外国人の受入れが増加傾向にあります。産婦人科の病床は32床を備え、緊急の帝王切開や無痛分娩も行っています。これらの傾向は、英語・中国語・ベトナム語に加え、インドネシア語やベンガル語など多言語ニーズの高まりを示しており、言語対応の強化が急務です。（*）専任の通訳コーディネーター配置やWiFiによるデジタルサービス提供の安定化、端末貸出体制の

構築など内部体制の整備を進めています。今後は通訳予約システムのUX改善や定期的な多言語研修、地域医療連携会議での成功事例共有を強化していく計画です。



▲分娩室



▲検査室



▼夜間専用入口



▼救急入口

*参照
https://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/961963_9245631_misc.pdf
https://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/951090_9128912_misc.pdf
<https://www.pref.okayama.jp/page/624881.html>

岡山済生会 総合病院

地域中核病院の多文化共生医療 進化する外国人患者受入れ体制と 多言語対応の最前線



岡山済生会総合病院
〒700-0021 岡山県岡山市北区国体町2-25
https://www.okayamasaiseikai.or.jp

部署別受入れ実態と 医療通訳の活用状況

■編集部 外国人患者の増加や多言語対応ニーズに対して、med iPhone（メディフォン）の活用範囲は広がっています。受付での診察対応はもちろん、医師との正確な医療通訳が求められるコミュニケーション現場、中期的なサポートを求められる産婦人科等での利用が挙げられます。部門ごとに具体的な活用シーンを皆様に伺いました。

中央手術室

■西中様 帝王切開手術中や術前訪問の場面で「専門的な指示も通訳者のサポートで一回で正確に伝わるようになり、スタッフの安心感が格段に向上した」と感じます。特に通訳者がリアルタイムで医療用語を補完してくれることで、通話品質の高い環境が整い、以前よりスムーズな手術進行が可能になりました。一部手術室でWiFi改善のニーズはあるものの、導入効果は明らかです。

産婦人科病棟

■兼田様 「コミュニティの口コミで導入効果が広がり、ベトナム系を中心とする妊産婦から『安心して通える』との声が増えた」と報告を受けています。費用面では出産育児一時金の範囲内で通訳も利用でき、「コストパフォーマンスが高い」と好評です。ポルトガル語やウクライナ語などマイナー言語でも事前予約で確実にサポートを受けられ、患者満足度が向上しています。

救急センター

■矢部様 「夜間・休日の急患対応でも、多言語通訳で不安な表情が減り、迅速な診断と治療につながっている」と実感します。自動翻訳アプリでは補えない医療用語も正確に伝えられ、患者と医師の双方向コミュニケーションが円滑になりました。

総務課

■孫様 「退院後の請求・保険返金手続きも通訳サポートを活用することで、手続き時間が従来比で短縮し、患者からの理解が深まった」と感じます。特に、日常的な問い合わせや継続的なフォロー

まず、多言語対応には通常業務の約2倍の時間を要することが確認され、スタッフからは「通訳を待つ間の空白が短縮されれば、より迅速なケア提供が可能になる」との声が上がっています。

■孫様 技術環境においては、手術室や救急センターでのWiFi電波状況にばらつきが見られ、一部エリアでは通訳接続が一時的に途切れることがあります。これに対し、病院は全館WiFiの再設計を計画し、電波強度の最適化とバックアップ回線の確保を進めています。

通訳精度では、AI自動翻訳では専門用語の誤訳リスクが依然として課題です。そのため、医療通訳士による事前チェック体制を強化し、定期的なフィードバックループを構築。併せて、診療ガイドラインやマニュアルの翻訳版を整備し、通訳者と医療スタッフが共通言語を持つことで、正確かつ一貫性のあるコミュニケーションを実現しようとしています。

今後は、これらの改善策を着実に実行するとともに、ビデオガイドや多言語説明書など標準化資材を拡充し、担当者の業務負担を軽

減。さらに、定期的な多職種研修を通じて、全職員の対応スキルを底上げし、質の高い多言語医療サービスを安定的に提供できる体制を目指そうと考えております。



アップでのコミュニケーションが向上し、未収金リスク低減にも貢献しています。

今後の外国人患者 受入れ体制強化に 向けた方針

■孫様 岡山済生会総合病院では、大阪・関西万博2025や大型国際会議などの影響を鑑み、多言語対応のさらなる強化に取り組んでいます。これらの国際的イベントにより多国籍の来訪者が増加し、要求される言語範囲が一層広がっているためです。

大阪・関西万博2025は、開催が大阪府のため近隣ではありませんが、会期中の訪日外国人は数千万人規模となります。この波及効果により岡山県内の医療機関にも一時的に多言語対応の需要が高まっており、当院では通訳予約システムの処理能力向上、少数言語への迅速対応、WiFi環境の安定化を進めることで、外国人の方々にも安心して医療を受けられる体制整備を強化していきたいと考えております。

改めて、外国人患者の受入れにおける各部署共通の課題は、主に時間コスト、技術環境、そして通訳精度に集約されます。

おわりに

med iPhone（メディフォン）導入によって、リアルタイム通訳によるスタッフの安心感向上や、多言語研修・ICT基盤強化による効率化意識の芽生えが明確に示されたと思います。

医療機関としては、単なる言語支援ツールの導入に留まらず、組織横断的な運用設計、技術インフラ整備、人的リソースの育成が不可欠です。今後も、地域の特性や国際イベントの動向を

踏まえた体制強化を続けることで、患者満足度のさらなる向上と地域医療の信頼性確立を目指したいと考えています。

■編集部 他院の責任者の皆様にも、本事例が自院における多言語対応戦略検討の一助となれば幸いです。多様化する患者ニーズに応じたサービス改善を通じて、持続可能な地域医療の実現に向けて共に取り組んでまいります。



「医療の入口」から始まる医療DX



天野 方一
Amano Hoichi

平良 侑希
Taira Yuki

訪日外国人の増加に伴い、医療現場では言語や文化の違いによるさまざまな課題が浮き彫りになっています。なかでも、予約・受付・問診といった「医療の入り口」における対応は、患者の不安や混乱を招くだけでなく、医療スタッフの負担も増大させています。こうした背景の中で、テクノロジーの力を活用し、外国人患者にもわかりやすくスムーズな医療体験を提供する取り組みが進みつつあります。本記事では、多くの外国人患者の受入れを行っているイーヘルスクリニック新宿院 院長・天野 方一先生と、多言語対応の医療アクセス支援サービスを提供する Ambii 株式会社 共同創業者&CEO・平良 侑希氏にお話を伺いました。

株式会社Ambii 共同創業者&CEO 平良 侑希

自分が海外で医療のアクセスに苦労した経験、日本では留学生に助けを求められた経験から世界のどこにいても安心して医療が受けられる社会を創るための手段としてAmbiiを起業。令和元年度つくばSociety5.0に採択されつくば市のサポートを受けながら多言語対応医師検索・予約システム及び14言語に対応したデジタル問診票を開発・提供している。

イーヘルスクリニック新宿院 院長 天野 方一

イーヘルスクリニック新宿院 院長、帝京大学大学院公衆衛生学客員研究員、久留米大学医学部公衆衛生学講座 助教、合同会社ActiveHealthLab代表など
埼玉医科大学卒業後、都内の大学附属病院で研修を修了。東京慈恵会医科大学附属病院、足利赤十字病院、神奈川県立汐見台病院などに勤務、研鑽を積む。2016年より帝京大学大学院公衆衛生学研究科に入学し、2018年9月よりハーバード大学公衆衛生大学院 (Harvard T.H. Chan School of Public Health) に留学。予防医療に特化したメディカルクリニックで勤務後、2022年4月東京都新宿区に「イーヘルスクリニック新宿院 (eHealth clinic 新宿院)」を開院。複数企業の嘱託産業医としても勤務中。
日本腎臓学会専門医・指導医、抗加齢医学会専門医、日本医師会認定産業医、公衆衛生学修士、博士 (公衆衛生学) の資格を有する。

増加する外国人患者の実情と課題

2025年4月、日本を訪れた外国人は約390万人に達し、単月として過去最高記録を更新しました。

また、在留外国人は令和6年6月末時点で約158万人に上り、都市部を中心に医療機関への受診ニーズが急増しています。※

天野氏 同院では多い日で患者の3分の1を外国人が占め、旅行者、居住者、アンチエイジング目的の受診など多彩な層が訪れます。旅行者の多くは発熱や薬の持参忘れなどによる急性の相談を目的とし、在住者は慢性疾患のフォローアップや定期検診を受けるケースが半数を占めます。

こうした多様なニーズに応える一方で、医療現場には大きな障壁もあります。まず、オンライン予約では日本の電話番号を必須とする既存システムが多く、旅行者や来日直後の居住者は予約自体が完了せず、問い合わせ対応が頻発しています。加えて、問診票が日本語のみ対応の場合、必要事項を入力してもらおうのに1件あたり20分以上かかるケースも珍しくありません。

これらのハードルは、外国人患者の安心感を下げるだけでなく、医療機関のスタッフにも大きな負担を強いています。言語の壁によりコミュニケーションが円滑に進まず、初診時のヒアリングに時間を割かれることで、診療・会計までのプロセス全体が停滞します。結果として、院内の回転率が低下し、患者満足度にも影響を及ぼす可能性があります。

医療機関の「入口」を変えよう：予約・問診のデジタル化と多言語対応

天野氏 従来の予約・問診フローには以下のような制約があり、DXへの着手が急務となっていました。

1. 電話番号必須のハードル

主要な国内予約システムでは、日本国内の電話番号が登録条件となっており、海外からの旅行者や来日直後の在住者は予約自体が完了できず、結果として予約センターへの問い合わせ件数が増加。受付スタッフの業務負担が肥大化していました。

2. 日本語のみ対応の問診票

紙またはPDF形式の問診票

は日本語設計が前提で、多言語対応は未整備。診療前のヒアリングにも二重手間が生じ、診療キャパシティを圧迫していました。

3. スタッフ教育・対応の限界

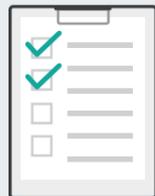
院長の私自身が英語・中国語を話せるとはいえ、全員対応は困難。本来の診療業務に支障をきたす場面も見受けられました。

従来の予約・問診フローにあった制約

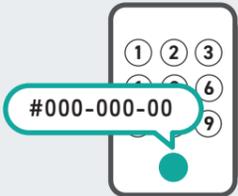
スタッフ対応



問診票



電話番号



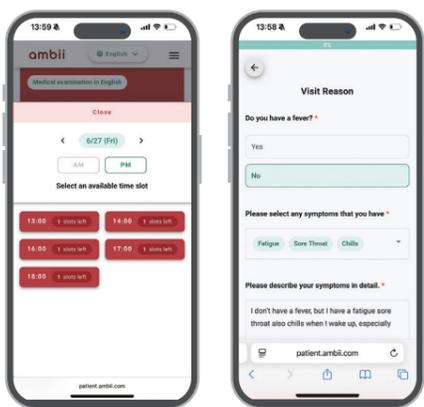
平良氏 「入口のDX」によって予約完了率や問診入力速度を改善し、次のステップとして院内コミュニケーションの効率化や他DXサービスとの連携を視野に入れた段階的アプローチを進めたいと思えましたね。

多言語対応と予約動線統合で実現する医療の「入口のDX」

天野氏 「入口のDX」の柱となるのは、多言語対応とスムーズな予約動線の統合です。イーヘルスクリニックを含む、多言語対応の医療アクセス支援サービス「Ambii」のユ

平良氏 「Ambii」のWeb問診票は単なるフォームの置き換えにとどまらず、クリニックの窓口業務から診療前準備までを一貫通貫でDX化する核となります。

これにより、従来の予約・問診フォームに比べ、ユーザーの入力ミスや誤解を大幅に削減しました。



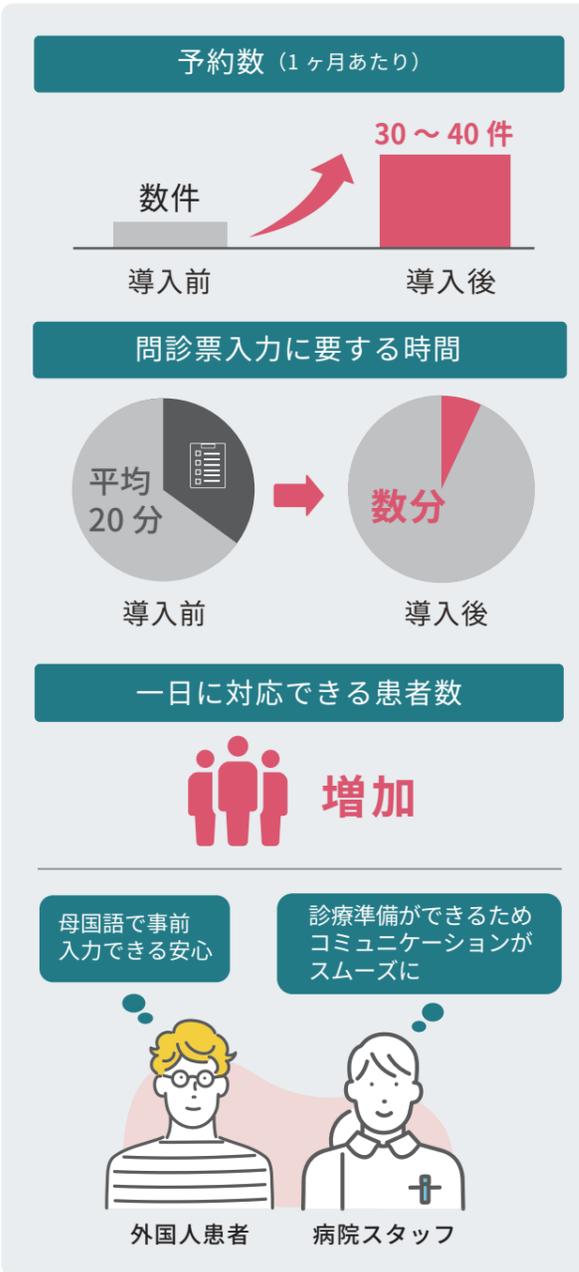
ambiiのWEB問診票予約画面(左)と問診画面(右)

※ <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20250521/k10014812211000.html>

「入口のDX」がもたらした効果

天野氏 Web問診票の導入により、イーヘルスクリニックでは以下のような成果が得られました。定量的な改善点として、予約が導入前は1ヶ月数件だったものが30〜40件へと大幅に向上。予約センターへの問い合わせ件数も減少しました。また、問診票入力に要する時間は平均20分から数分へと短縮され、1日に対応できる患者数が増加しています。

次に定性効果として、外国人



患者からは「母国語で事前入力できる安心感」が評価され、再訪意向(LTV)は導入前に比べ上昇。スタッフからも「事前情報をもとに診療準備ができるため、コミュニケーションがスムーズになり、診察室の滞留時間が減った」との声が上がっています。

の準備ができる。これは非常に大きいですね。

平良氏 こうした仕組みがあることで、患者さんの安心にもつながりますし、医師側の心理的負担も軽減されます。さらに、問診票は多言語に対応しているため、日本語以外を話す方との初期コミュニケーションの障壁も、ぐっと下がります。とても嬉しい成果につながったと感じています。

天野氏 一方で、患者数が増加したことで新たな課題も生まれています。

自分の専門領域外の患者さんも増えていて、他科に案内するケースが多くなりました。でも、『紹介できる外国語対応の病院が分からない』『紹介状が出せない』などの壁があり、患者さんが受付で座ったまま、行き先が決まらないケースも出てきました。

関はもちろん、サービスベンダーも意識したいですね。

平良氏 そのとおりですね。『外国人だから大変』という感覚自体が、DXの仕組みによって無くなりつつあるんですよ。『普通に対応できている』ことが、スタンダードになってきています。

天野氏 あらためて、外国人対応は特別なことではなく、日常の一部になるべきだと思います。これから訪日外国人はさらに増加するでしょうし、非日常をどう日常化していくかを、我々医療機関

天野氏 ツールがうまく回れば、医師もスタッフも負担は大きく減ります。最初の接点である受付と問診がスムーズであれば、診療の質も上がるし、患者さんも満足します。今後、医療の現場がより多様化し続ける中で、DXの果たす役割はますます重要になっていくと感じます。これからがとても楽しみです。



イーヘルスクリニック新宿院

「外国人対応」ではなく、「患者対応」の延長線にある未来へ

天野氏 現場の実感として、外国人患者への対応には「時間がかかる」「説明が伝わりにくい」と

「トラブルになりやすい」といった負担があるのは事実です。特にクリニック規模の医療機関では、「日本人患者と同じ診療報酬で、手間が増える」という構造的な課題も指摘されました。こうした負担感から、外国人受入れを敬遠する医療機関が一定数存在していることも否めません。

しかし、現実には訪日外国人の数はコロナ前を上回る勢いで増加しており、2026年以降もさらなるピザ緩和が進めば、地域の医療現場にも確実に影響を与えることとなります。コンビニや飲食店で外国人店員が当たり前になったように、医療の現場でも「対応せざるを得ない」状況はすでに始まっています。

ambii 多言語対応のWeb問診票

mediPhone 遠隔医療通訳 / 多言語対応支援

ambii医療機関管理画面

ろ、それが集患や売上アップにもつながるポテンシャルを秘めていると思います。

平良氏 私たちが提供する「Ambii」のような多言語対応のWeb問診票サービスや、メディフォンが提供する医療通訳・多言語対応支援といった仕組みを組み合わせることで、外国人患者であっても「日本人と同じくらいの時間・労力」で対応できるようにする必要があります。『対応できる』と『実際に対応する』両輪が揃えば、十分に受入れは可能ですね。



患者さんとのやり取りに、デジタルという選択肢を。



代表取締役 / CEO
澤田 優香



検索・予約・問診までをワンストップで提供

多言語対応
医療アクセス支援サービス



共同創業者 / CEO
平良 侑希



多言語A-I翻訳機能は、外国人妊婦の多い病院から「英語コンテンツを作ってほしい」との要望を受けたことが開発のきっかけです。PoCとして英語の説明資料を作成し、外国語対応の負担軽減を実現しました。課題を深掘りすると、地域によってはベトナム語・中国語・ポルトガル語など、英語以外の対応も必要と分かり、多言語での対応を可能にすることを目指しました。

1 「多言語A-I翻訳機能」は2 どのような経緯で開発されたのでしょうか。

「ポケさぼ」は、動画やメッセージを活用して医療者の説明業務を支援する患者説明機能と、スマートフォンやタブレットで行えるアナムネ問診機能を備えたコミュニケーションシステムです。患者説明機能に特化してご説明しますと、入院日や検査日などの「Xデー」を起点に情報を自動配信します。患者は動画で内容を自宅で繰り返し確認でき、医療者は患者の理解度の把握も可能です。これにより、説明体験の向上と説明業務の効率化、業務負担の軽減に貢献しています。

1 サービスの概要と2 特徴を教えてください。

「ポケさぼ」は、特定機能病院群や大病院に準じる規模の急性期病院を中心に導入が進んでいます。特に、入院支援センター、周術期麻酔センター、母子周産期医療センター、内視鏡センターなど、複数職種が関わる外来「センター」で多く活用いただいています。また、急性期病院に限らず、整形外科専門病院や産院など、診療科に特化した医療機関にも適しています。入院・検査・化学療法など、情報伝達が増える場面で、書面や口頭では伝えきれない内容をデジタルで補完

3 どのような医療機関におすすめしたいですか。

説明資料を英語に翻訳 (PoC事例)

に時間を要します。ポケさぼで代替することで、説明時間の短縮や医療者の負担軽減に繋がると考え、この機能を開発しました。

入退院支援センターの業務効率化と患者利便性の向上を目的に「ポケさぼ」を導入した医療機関では、利用者アンケートで94.2%が「役に立った」と回答しました。業務面では、患者1人あたりの説明時間が5〜10分短縮され、月615人の対応で年間615〜1230時間の業務削減を実現している医療機関もあります。また、高齢者のLINE利用に対する不安にも丁寧に対応し、チーム医療を支える新たなコミュニケーション基盤として活用されています。

4 具体的な活用事例を教えてください。



し、チーム医療を円滑に進めたい医療機関に特におすすめです。

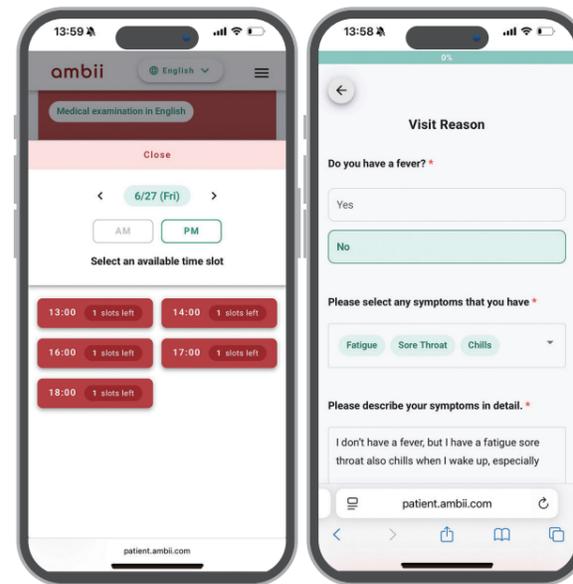
無料デモンストレーション申し込みはこちら

<https://app.aite.masu.me/u/pokesup/15min>

5 Mディフォンの事業提携について

昨今の訪日・在住外国人の増加に伴い、「ポケさぼ」を利用する医療者間で、多言語対応に課題を感じるケースが増えています。特に問題となっているのが、医療制度や入院に関する説明とコミュニケーションです。定型的な医療制度の説明を「ポケさぼ」で行い、個別性の高い対応をMディフォンの遠隔医療通訳・AI翻訳で補完することで、医療者と外国人患者の円滑で質の高いコミュニケーションが実現できると考え、事業連携を開始する運びとなりました。今回の連携を圧力的スビードで決定、実行して下さった澤田社長をはじめMディフォンの皆様にご心より御礼申し上げます。本連携を通じて、医療現場の多言語対応の負担を軽減し、外国人患者が安心して医療を受けられる体制づくりを支援することも、医療現場の働き方改革と患者サービスの向上に貢献してまいります。

4 分の1に。加えて、問診票のカスタマイズ性が高く、事前に滞在日数や保険の有無といった情報も把握できるため、追加対応の手間が減り、よりスムーズな診察が実現しました。外国人患者の受診が増えることで結果的に収益増加にもつながったというお声もいただいております。



ambiiのWEB問診票予約画面(左)と問診画面(右)

1 サービスの概要と2 特徴を教えてください。

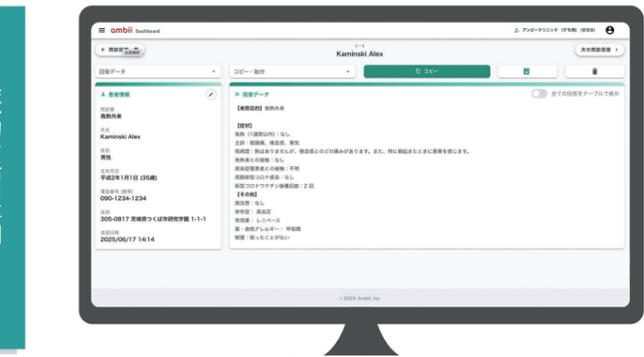
Ambiiは、外国人が医療機関を簡単に検索・予約でき、医療機関も外国人対応をスムーズに行える、多言語対応の医療アクセス支援サービスです。検索・予約・問診までをワンストップで提供し、患者には安心で手間の少ない医療体験を、医療機関には対応負担の軽減と業務効率化を実現します。翻訳はAIによるリアルタイム翻訳で、医療用語は事前登録により精度を高めています。世界中どこにいても、安心して医療が受けられる社会の実現を目指しています。

2 どのような医療機関におすすめしたいですか？

外国人患者受け入れに寛容な医療機関におすすめです。つくば市や千葉県など外国人労働者が多い地域、また新宿などの旅行者が多い都市部でも多く利用されています。Ambiiはクリニックに限らず、あらゆる規模・診療科の医療機関で導入可能で、外国語対応可能な医療機関の掲載も行っています。契約医療機関には、オンライン予約を優先的に提供しており、利便性の高いサービスを求める医療機関に適しています。

3 具体的な活用事例を教えてください。

日本語が話せない方には、多言語対応の紙の問診票を使ってもチェック項目が中心となり、細かな症状や背景を聞くのが難しく、必要に応じて翻訳アプリで追加の問診を行っていました。Ambiiでは、患者が自由に記入できるフォームを通じて詳細を把握でき、その内容が自動で翻訳されるため、翻訳アプリの使用頻度は約



ambii医療機関管理画面

無料デモンストレーション申し込みはこちら

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSeOV_SQUiNkxJB74ft2-fuqpdmdyJKqyr_RmJ97Pq_rkAKxyj0A/v/iewform



4 分の1に。加えて、問診票のカスタマイズ性が高く、事前に滞在日数や保険の有無といった情報も把握できるため、追加対応の手間が減り、よりスムーズな診察が実現しました。外国人患者の受診が増えることで結果的に収益増加にもつながったというお声もいただいております。

ご好評
につき

アーカイブ動画 配信決定!

外国人患者対応を実際に行っている医療機関の生の声をご紹介します

mediPhone

こんな時どうする?

外国人患者対応

～拠点病院に学ぶ現場の工夫とは～

7.31 2025 | アーカイブ配信
木 18:00まで



大野記念病院
ICM認定医療通訳士・
外国人患者受け入れ医療
コーディネーター
鈴木 尚美



大阪けいさつ病院
看護師長
松尾 慎子



メディフォン株式会社
医療支援部
北村 純

主な対象

- 外国人患者の対応に不安がある方
- 他院の対応方法や受入れ事例を知りたい方
- これから受入れ体制を整えたい医療機関の方

お申し込み方法

右のQRコードからお申し込みください。

*期間中は好きな時間に何回でもご視聴いただけます。
視聴後、画面に表示されるアンケートにご回答いただいた方には講義資料をお送りします。
*同業他社の方はお断りさせていただく場合がございます。

登壇者

大阪記念病院ICM認定
医療通訳士・外国人患者受け入れ医療コーディネーター 鈴木 尚美
大阪けいさつ病院 看護師長 松尾 慎子
メディフォン株式会社 医療支援部 北村 純

主催

メディフォン株式会社

お問い合わせ先

電話：050-1725-8533 (平日 9:00-18:00)
メール：contact@mediphone.jp (担当:松田)

申込みフォーム



<https://mediphone.jp/seminar/250528/>

メディコの目安箱



medico+で取り上げて欲しい記事のテーマ・メディフォン株式会社で開催してほしいセミナーの他にも、「今こんなことで困っています!」というご意見や、他院に相談してみたいこと、自院での外国人患者対応策など、なんでもお気軽にお送りください!
今後のメディフォン株式会社の企画に反映させていただきます。



<https://forms.gle/5oTHwHbqUd7ooHLM6>

院内回覧用

部
/
印

部
/
印

部
/
印

部
/
印

部
/
印